

接骨院に 心理学を入れてみた

〔4〕

寺田接骨院 寺田弘志

イエス・キリストは、手をかざすだけで、歩けなかった者を歩けるようにしたと言います。そういう奇跡が、神様の起こしたもののなのか、そうでないのかは、私にはわかりません。でも、神様の力があってもなくても、そういう奇跡が起こりうることは確かです。

J R 茨木駅近くの接骨院が私の仕事場です。そこで最近、こんなことがありました。

ある患者さんは、福山雅治の熱烈なファンです。膝と肩が痛くて、当院に通われていました。

「膝が痛いのに、コンサートに行けるかな」、「肩が痛いけれど、（タオルを振る曲のときに）タオルが振れるかな」と心配していらっしゃいました。

しかしコンサートを最前列で聴いていたら、痛みが完全に消えてし



まったそうです。もちろん、タオルを振っても大丈夫でした。

数日たつと痛みがもどってしまいましたが、数カ月後にまたコンサートに行かれた際は、膝の腫れが引くという奇跡が起きました。

「信じるものは救われる」と言いますが、誰かを信じ、とてもありがたい存在と心底思っている人なら、その人が手をかざしたり、ほほ笑んだりしてくれるだけで、恍惚となってもおかしくありません。

恍惚状態では脳内モルヒネと呼ばれるエンドルフィンやドーパミン・オキシトシン・セロトニンなどが、脳内に大量に生成されると言います。

これらの物質には、強力な消炎・鎮痛作用と、多幸感をもたらす作用があり、自然回復力も高まると考えられます。その結果、痛みが消え、歩けなかった人が歩けるようになるのです。

このような現象は、趣味に熱中したり、ペットをかわいがったり、恋愛したり、さまざまな心理的な営みの中でもみられます。

これは余談ですが、「レントゲンでも血液検査でも異常が見つからないから、あなたの痛みは気のせいです。趣味を持ったり、ペットを飼ったりしなさい」と患者さんに言うお医者さんがいらっしゃるようです。

「心理的なことで痛みが軽くなった事例があるから、画像診断や血液検査で異常が見つからない痛みは心理的なものだ」という主張です。

「逆は必ずしも真ならず」で、詭弁（きべん）なのですが、それをお医者さんがテレビ番組で言ったりすると、それを信じる人も少なくないようです。

「家族や知人に『痛いのは気のせいじゃない』、『趣味を持ったり、ペットを飼ったりすると良くなるってテレビでやってたよ』と言われた」という話を、何人かの患者さんから聞いたことがあります。

●最近「神わざ」と思ったこと●

立命館大学茨木キャンパスで1月から2月にかけて「団士郎家族漫画展」が開催されていました。対人援助学に関わられている皆さんならご存知のことと思いますが、団先生は家族療法家でもあり、漫画家でもあります。

その漫画展で「ひとつめ」というタイトルのケースが紹介されていました。（まだお読みでない方のために、団先生のご理解を得て、次ページ以降に掲載させていただきました。不鮮明とは思いますが、ぜひ、お目通しください。）

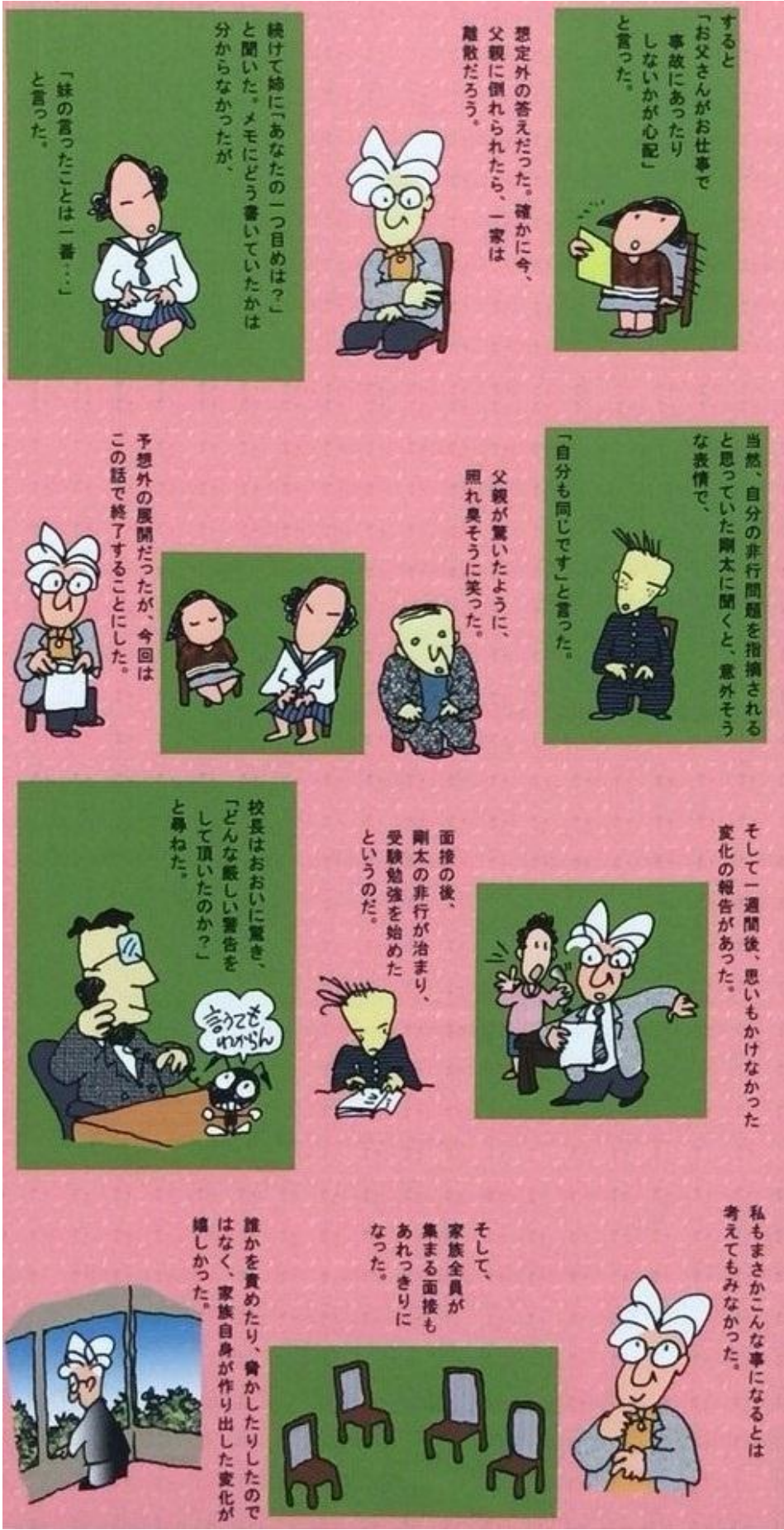
母親が出て行き、父親は一生懸命三人の子どもを育てているけれども、中学3年の長男が悪質な非行



家族療法では「非行の原因は何だと思えますか？」というような、原因追求、犯人探しをする質問はしません。むしろこのケースのように「解決したいことは何ですか？」「どうなりたいですか？」というような解決志向、未来志向の質問をします。

その答えをもとに指示やアドバイスを出すことが多いと思うのですが、団先生は質問をただで、何の指示もせず、家族自身に解決させていらっしゃいます。私は「これぞ神わざ」と感心しました。

整形外科や理学療法の分野では、原因を探るために痛みを誘発するような検査（痛がらせる検査）がよく用いられます。当院では、原因を究明する検査以上に、解決方法を見つける検査（どうしたら痛くなくなる



かをうかがう質問)を重点的におこなっています。これは以前家族療法を仕事にしていた影響があると思います。解決方法がわかると、ちょっと押したりさすったりするだけで痛みが消えてしまうことが少なくありません。

イエス・キリストや福山雅治のように手も触れずに痛みをとることや、団先生のように質問するだけで治すことはできませんが、解決方法を見つける検査を使えば、従来の原因を探る検査よりもずっと早く痛みをとることができるのです。